



土御門上皇と尊良親王

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人

会長
土森正一

文責
寺尾敏夫

幡多には何故か皇族が二度配流されている！



高良神社本殿（明治17年建立・再建とある）



承久の乱

●1221年承久の乱
承久の乱（じょうきゅうのらん）は、1221年（承久3年）に、後鳥羽上皇が鎌倉幕府の

●樋口真吉の江戸末期から少し時代を遡りますがご了承下さい。表題に掲げたように幡多には皇族が何故か二度配流になっている。

鎌倉幕府に反旗の度に幡多に配流？

執権である北条義時に対して起こした、貴族政権を率いる後鳥羽上皇と鎌倉幕府の対立抗争である。鎌倉幕府が勝利を飾り、鎌倉時代初期の幕府と貴族政権や治天の間に存在した緊張・融和などの諸関係がもたらす政治史の一つの帰結であったとされる。日本史上初の朝廷と武家政権の間で起きた武

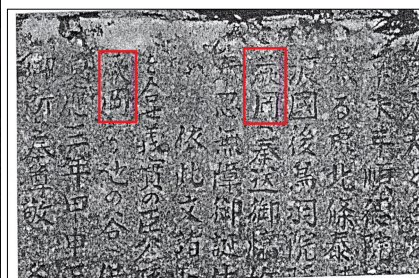
瓦には菊の紋章が付けられている。



力による争いである。後鳥羽上皇が鎌倉幕府に反旗を翻した事件で、後鳥羽上皇は敗戦後に隠岐の島に流罪となり、土御門上皇は幡多に自ら進んで配流となった。その痕跡は何故か四万十市蔵岡にある。

●蔵岡には高良神社もあるが、京都の岩清水神社の摂社高良神社を勧奨したとされている。京都では公家衆の産土の神社として尊敬されているので土御門上皇が京都を偲んでの事であったと思われる。現在の高良神社の瓦には菊の御紋が付与されており、明らかに天皇家との関係を示しているが、詳細はわからない。

以来、鎌倉武士の守護神となった鶴岡八幡宮には摂末社の今宮があり、承久の乱で敗者となった後鳥羽上皇、順徳上皇、土御門上皇の3人が祀られているという理由が判らない。



拡大した「帝王略記」石碑
※ 蔵岡の文字がある



現地調査団



土御門上皇の御所の井戸

元弘の乱

○1331年元弘の乱

●元弘の乱(げんこうのらん)は、鎌倉時代最末期、元徳3年(1331年)6月5日(1331年6月5日)から元弘3年6月5日(1333年7月17日)にかけて、鎌倉幕府打倒を掲げる後醍醐天皇の勢力と、幕府及び北条高時を当主とする北条得宗家の勢力の間で行われた全国の内乱。●元弘元年(1331年)



に発生した元弘の乱では、尊良親王は父・後醍醐天皇と共に笠置山に赴いたが、同城が落ちる前に楠木正成の立てこもる下赤坂城に移った。しかし、10月3日、尊良親王は幕府軍に捕らえられ、佐々木大夫判官の預かりの身となった。同月10日に検知を受け、12月27日に土佐への流罪の判決が下り、翌年3月8日に京都を出立して土佐の畑の庄へに流された。同時にこの時後醍醐天皇は

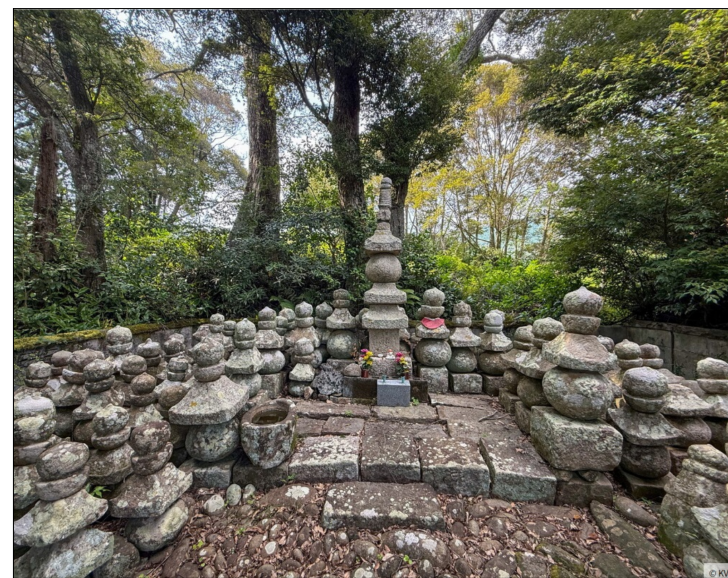


隠岐へ流罪となった。何故土佐に配流となつたのか理由は判らない。決定したのは北条政権であり、百年前の土御門上皇の配流の例を参照したかわからないが、皇族がこの地に配流される二例めとなった。●その土佐には「黒潮町有井川」と「四万十市下田」の二ヶ所に尊良親王の足跡が残されている。最初に有井川に上陸したのは3月下旬、下田に貴船神社を勧奨して部下の一人を

暗殺予定か？

●有井川での尊良親王は最初は有井庄司の館に迎えられ、次に大平弾正の館に移り、ほどなく米原に御在所を移している。北条方から攻められていた。それを何とか二人の忠

臣が御守をした。単なる配流なら尊良親王の館を移すことはない。数か月後に尊良親王が有井川を出立する時、親王は切に有井庄司に京迄同道するように願ったという。有井庄司は年齢を理由にお断りをしたが、後に親王が京に帰着した後に、有井庄司の訃報を聞いて、いたく悲しみ、五輪の供養塔を造らせて有井川に官船で届けたという。その五輪の供養塔が今も有井家の墓所に現存している。過去の歴史に皇族が戦のため地方に赴くことは少なからずあり、その地の忠臣に世話になった例はあったと思うが、その忠臣の墓を京都から運んで手向けるという前例は皆無だと思われ、有井庄司の墓は唯一無二の存在で、それだけ有井川での戦いは親王とお断りした事を痛めており、暗殺されかけた事実を指し示している。この断片的文獻は無い。他に暗殺説の視点は無い。



下田の歴史は尊良親王から始まった。

●**尊良親王**は有井川を発つて下田に上陸された際に御座船の守り神として京都鞍馬の貴船神社を勧奨したとされその船が接岸した下田に大祖神として貴船神社を奉ったとされる。

●左記の文献が下田の貴船神社の神官の**宮畑家**に伝わっている。

●**尊良親王**が1332年七月二十七日**長崎刑部左衛門**を貴船神社の神職に命じている。その子孫の**宮畑家**が代々貴船神社の神職を務め連綿と職責を全うした。

昭和23年になりオリビック水泳選手**宮畑虎夫**氏が出て**宮畑家**は神職を辞したが六百年に渡って責任を果たしたことは素晴らしい事ではないか。**宮畑虎夫**氏は日本水連の役員として活躍し、中村市名誉市民になっている。

●**尊良親王**については、史跡が下田と有井川、即ち四十市と黒潮町とにある。これを行政の枠を超えて歴史的な検証が必要であったと思われる。日本史に於ける鎌倉幕府の崩壊と

今を去る六百七十八年前、元弘二年三月、後醍醐天皇の皇子尊良親王が土佐に配流されたことにより下田の歴史が始まる。

次は宮畑家の御系譜の拝観を許され書き写したものである。

貴船神社由緒

元徳二年(一三三二)七月二十七日一宮尊良王ノ齋記にて長崎刑部左衛門を以て神職となす

古社調云勸請由縁記云元王九十五代後醍醐天皇元徳元年北條相模守高時依叛逆一宮尊良親王を土佐國へ奉配備多郡入野郷有井川へ奉移御船者當渡へ入津有之然に右船船の御守神として被馬山鎮座貴布祿の御神を御勧請御着岸之後當處へ御遷座奉りて當所の代祖神と仰ぎ同二年七月廿七日木船谷に一字を造宮し之に崇め鎮め奉る

其の後新王には御婦洛被為之 貴布祿の神明は當所万々社の御守神に崇尊鎮奉 付御家臣長崎刑部左衛門正利社殿に被命永護為當所へ残し被置 也右貴布祿の御神當處へ御遷座之頃迄は此の地には人も家も無之間崎村の地に栗原町と云商漁の居住す町ありて御齋鎮後は正利の子孫繁盛仕其餘人家も次第に繁昌仕右栗原町も此地へ引移 由申傳 元禄七年(一六九四)九月八日木船谷より遷座遊ばさる

- 98 -



天皇親政を望む朝廷との政権争いの事件の一幕がこの地で展開されていたという認識が各行政でなされていない。四十市史の記述に「下田の歴史**尊良親王**から始まる」と記述して欲しいものである。

●左記の「描かれた土佐の浦々」によると、下田は渡川(四十市)の河口にあり、港の水は深く、大型船が寄港しやすい港で、漁港ではなく物資の中継基地として栄えていた。船主が廻船業業務の大商人が生まれ、江戸中期以降下田は大いに繁盛した。木炭や木材を高知、大坂、江戸に運び、帰り便で物資を仕入れて中村の商人に転売する船主が出現して下田には造船業と運搬業で大繁盛の港となった。遡ればこれも偏に**尊良親王**と**貴船神社**のお陰ではないだろうか。戦後物流の流れが大きく変ってしまった。

樋口真吉の写真をめぐる話題

●「樋口真吉の写真をめぐる話題」という渋谷雅之先生の資料が見つかったので、拝借してご紹介します。

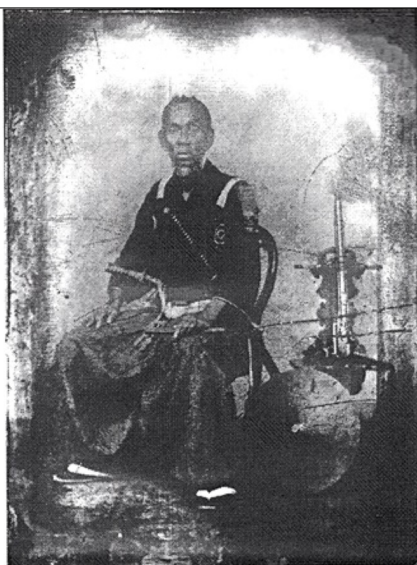
●**樋口真吉**の写真は2枚が知られているが、もう1枚は桑原戒平の「樋口先生」に載った写真がある。説明次頁

下岡蓮杖の写真

●左記の写真は最もよく見る1枚で**下岡蓮杖**



樋口真吉写真(1)
(107 x 80 x 1.5 mm)
アンプロタイプ(透過型種板)
木製板は収納箱の蓋か?



が横浜に店を構えた時、真吉が会津戦争を終えて土佐に横浜から帰還する際に撮影したものだとしてる。脇に連発銃が写っているのだからそれとわかる。

●**下岡蓮杖**は日本の写真術の先駆者の一人で、静岡県下田の出身で、横浜で米国人写真師運シンから「湿板写真術」を学び、文久二年、長崎の**上野彦馬**とほぼ同時期に横浜で写真館を開業し、後に浅草に移ったという。**樋口真吉**の写真を書した慶応四年は**下岡蓮杖写真館**の最盛期だと書かれている。真吉の写真の2枚目は



右: 樋口真吉写真(2) (105 x 75 x 1.5 mm) アンプロタイプ(表面に茶褐色着色)

堀与兵衛(保利与兵衛、大坂屋与兵衛)

堀与兵衛は文政九年(1826)、京都に生まれた。大坂でガラス製造を学び、京都丸太町高倉東入ル堺町門前にガラスの看板を掲げた。26歳の時寺町弘光寺下ル西側に店を出した。当時京都に在住していた舎弟者、辻礼輔と組んで写真術を研究した。元治元年(1860)七月の禁門の変以後、写真術を渡世する決心をし、翌慶応元年には京都切通しに写真館を建て「西洋写真真処 祇園町出店写真真場 保利與兵衛」の看板を掲げた。

保利与兵衛が祇園支店に写した写真は土佐関係者が多く、谷干城、中岡慎太郎、田中光頭、長岡謙吉、美正貢一郎、小笠原唯八、岡本健三郎、佐々木三郎郎を写した各写真が残されている。祇園支店の写真の特徴として、チェス盤のような模様(元禄市松模様)のある数物が、従来の研究でよく知られている。他に、谷干城の写真に見られるように、花びら模様の数物が下からのぞいている例がある。祇園支店の写真は、人が座る程度の高さの緑台に数物が載けられた仕掛け(船形)であり、人物は緑台に座るか腰掛けて写す例と、緑台の前に立つて写す例がある。緑台の前は、土間だった。堀与兵衛は明治十三年に没し、長男の堀真澄(二代目堀与兵衛)が跡を継ぎ、その後三代目・堀真澄(与一郎)に受け継がれた。四代目堀真澄(順三)のとき、太平洋戦争のため堀写真館の歴史が終わる。



京都の堀与兵衛祇園店での1枚で、左記の記事には真吉の名前はなにもないものの背景下部の模様が堀与兵衛の模様と同じであると判る。

